

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2374900328		
法人名	愛知三愛福祉会		
事業所名	グループホームあいわ		
所在地	愛知県日進市米野木町987-58		
自己評価作成日	令和 3年 1月10日	評価結果市町村受理日	令和 3年 4月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigovsyoCd=2374900328-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigovsyoCd=2374900328-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	愛知県名古屋市緑区左京山104番地 加福ビル左京山1F		
訪問調査日	令和 3年 1月29日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

自然に囲まれ静かで穏やかな環境の中で、のんびりと笑いのある日々を過ごしている。利用者が健康でのびのびとその人らしく生活できるよう、また、利用者の新しい可能性や生きる喜びを見つけられるよう、スタッフと利用者との協働し支え合いながら生活している。またスタッフは、認知症ケアの専門職としての自覚を持ち、専門性の向上に努めている。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

利用者を「住人さん」と呼び、本人主体の支援を行っている。起きて来た時間での朝食、食事の場も居室や居間、暖炉前など、希望に合わせて対応し、居室で編み物をしたり相撲観戦したりと、それぞれの従来のライフスタイルを大切にしている。  
 コロナ禍により積極的に取り組んできた外出支援が困難な中、散歩やドライブ、畑仕事で外気に触れる機会を設けている。グループラインを利用し、遠隔地の家族間での集いをバックアップしたり、感染症対策を講じて玄関先での面会の継続など、良好な家族関係の継続にも取り組んでいる。  
 今年度、家族の意向や利用者の状態、医療連携もあり、初めてホームでの看取りを行った。看取り期間の家族面会も十分に配慮し、職員は管理者からの助言で強い気持ちを持つことができ、皆が「良かった」と思える経験となった。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「慣れ親しんだ地域でその人らしく生活していくこと。」の大切さを職員が共有し取り組みを話しあう機会を作っている。	職員ミーティングで理念について振り返る機会を持ち、地域の中でその人らしく暮らしていけるよう取り組んでいる。利用者一人ひとりと向き合い、安心を提供することで最期までいい時間を過ごせるよう努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	広報や地域のポスターを活用し、地域活動に参加している。感染拡大の観点から直接的な交流を避け、地域交流のありかたを模索していく。	地域行事に参加し、近隣にある同法人の特別養護老人ホームで行われるオープンガーデンでは、利用者の作品を展示して来訪する近隣住民と交流を図ってきた。外国人ボランティアとの交流を計画していたが、コロナ渦で中断している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人で行う地域貢献企画にグループホームとして参加している。事業所単独の活動は無いが入所相談、施設見学を随時受け入れホームの役割を説明している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	活動報告や利用者の生活状況の報告を行い、意見交換をしている。地域の情報を取り入れ活動に生かしている。	運営推進会議には区長や民生委員、行政が参加している。ホームの取組みを報告し、地域の情報の提供を受けて運営に活かしている。家族の参加を促すため、コロナ収束後にはホーム行事と併せて開催することを検討している。	家族は協力的で面会も頻回であるが、運営推進会議への参加が得られていない。開催の日程や開催方法などの検討が必要であろう。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議を通して現状報告をして情報提供をしている。	運営推進会議に市職員と地域包括支援センター職員の両者が参加し、情報提供を受け、地域やホームの課題の相談をして緊密に連携している。市から設備改修の支援を受け、コロナ関連の通知や対策の協力が得られている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内で行う身体拘束適正化委員会と内部研修に参加し、職員同士で情報の共有や意見交換をしている。身体拘束をしないケアを心掛けている。	同法人の特別養護老人ホームと合同で身体拘束適正化委員会を開催し、職員ミーティングでその内容を周知している。定期的に研修を行い、現場に即した事例を検討することで、不適切ケアの見直しやスピーチロックなどの意識改革につなげている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内で行う内部研修に参加し理解を深めている。市や地区の研修会に参加や、地域包括からの情報も取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度について学ぶ機会がなかった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に各家庭に契約内容を説明している。施設での生活をどのように過ごすのか話し合い理解を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時に近況報告をスタッフ間で行い日々の様子を些細な内容でも伝えてもらうように話している。	コロナ渦で家族の面会が困難な時期も、ライン動画や通話を活用して交流の継続を図っている。家族意見を記入する専用ノートを作り、職員間で情報を共有している。管理者は家族と個別に面談する機会を設けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日朝・夕2回の申し送り時に意見や提案を出し月1回行っている。ミーティングで確認をしている。必要に応じて総務会議でも議題に挙げて検討している。	毎月のミーティングや申し送りに限らず、管理者は日常から職員意見の聞き取りを行っている。職員は定着しており、職員間の意思疎通は良好で、ホームの課題には全員で話し合って取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員がそれぞれの個性を生かし、アイデアを出し合いやりがいをもって取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月1回ある法人内の内部研修で学ぶ機会がある。外部研修にも可能な限り参加をし、学んだことを内部研修などで発表する機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	一部施設との情報共有や施設見学はあるが、同市内のグループホームとの交流はほとんどない。入居者の情報交換は随時行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設訪問や自宅訪問をし本人の不安を出来る限り聞けるように寄り添った関係づくりをしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学や申し込みの時点からの関係づくりを大切にしている。また、じっくり話を聞き、不安や困っている事を何でも話せる間柄になれるように努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談時に本人の状況を聞きながら、入所見当を行い必要に報じて他の情報提供も行う。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に生活をしていくことを念頭に、できる事を継続し生きがいを持って生活できるよう支えあっていく。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	活動に関心を持っていただき行事の参加や三愛だよりなど近況報告をして一緒に支えていけるようにする。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	誕生日や外出企画などの際、利用者の馴染みの人との面会や場所へ一緒に行くよう支援している。また電話や手紙等の支援にも努めている。	教会のミサに参列したり、知人の来訪を受けたりと、馴染みの関係継続を積極的に支援してきた。コロナ禍の現在、グループラインや電話、手紙などの通信支援に取り組んでいる。編み物や畑仕事等、趣味の継続も支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	状況に応じてスタッフが間に入り穏やかな雰囲気をつくれるようにしている。不穏な場合は個別の対応も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終了後は連絡を取ることほとんどないが、同法人の特養に移った場合は情報を貰い関わりを継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話や表情、行動表現を少しでも多く観察し読み取りその人らしい生活は何かを考えている。	利用者に寄り添い、日常の支援の中で思いを汲み取るよう努めている。利用者と1対1になれる機会にはゆっくりと向き合い、本音が探り出せるよう取り組んでいる。掴んだ情報は、申し送りやミーティングで情報共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に家族より今までの生活の様子を細かく聞き取るようにしている。入居後も変化に対応できる様に情報は収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人主体の生活リズムを大切にして本人らしく暮らせるように支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の思いを大切に行かせるプランの作成に努めている。ミーティングで個々の介護計画を定期的にモニタリングし、その人らしいプランとなるよう努めている。	入居後しばらくは3ヶ月毎に、その後は6ヶ月毎に介護計画を見直している。見直し月には1ヶ月かけてモニタリングを行い、ADL、IADLについても評価している。「叶えていく手順」の実行を毎日記入していく仕組みがある。	利用者の思いに着目して介護計画に具体性を持たせ、職員以外にも家族や地域など多くの人が関わり、チームで利用者を支える介護計画の作成を期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員全員が住人さんの情報を共有している。ミーティングや申し送り字に問題があれば検討し見直しする。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の望みをその時々で把握できないこともあるが、今後はサービスの多機能化に取り組んでいく事が課題である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	病院・消防署・スーパー・コンビニ・喫茶・薬局等、地域にある様々な資源を活用し豊かな生活ができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月1回の定期受診はスタッフが付き添い随時家族に報告している。訪問看護とも連携し柔軟な対応を心掛けている。また、歯科による往診も受けている。	月2回訪問看護師による健康管理が行われ、隣接している総合病院を協力医として、概ね月1回職員が同行して受診している。月1回歯科衛生士による口腔ケアが行われ、治療は特別養護老人ホームの歯科で受けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期受診時、薬局の薬剤師など日頃の様子を伝え助言を受けている。現在訪問看護を導入しているため、24時間看護師の助言も受けることが可能である。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	普段の定期通院時から協力病院との関係づくりを意識している。また、訪問看護とも連携し早期退院に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ホームの指針をもとに、本人、家族、医療機関と連携して、ご本人にとって最良の終末期となるよう支援していく。	家族との十分な話し合いの下、浴槽が跨げない、食事形態が対応できないなどを目安に、同法人の特別養護老人ホームや他施設への移行を支援している。今年度家族の希望があり、急激な状態の低下が見られた利用者を、訪問看護と連携してホームでの看取りを行った。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急救命講習を定期的に受けている。マニュアルの見直しを兼ね内部研修に参加し実践に役立っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、消防署の指導の下、住人さんと避難訓練を実施している。震災時の避難訓練も年1回行っている。法人としても緊急連絡網を見直しより実践的な訓練を行っている。	年2回消防の立ち合いを得て避難訓練を行い、助言を得ている。隣人に災害時の協力を依頼し、見守り等の支援が得られている。AEDや自家発電機を設置し、同法人の特別養護老人ホームと合同で災害対策に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日々の生活で馴れ合いの関係にならないよう一人ひとりの人格を尊重する声掛け・接遇を心掛けるよう努力している。	ミーティングで接遇について話し合い、自尊心を傷つけない支援に取り組んでいる。利用者に対等な立場で会話し、何事も押し付けることのないよう努めている。利用者のやりたい事ができる自由な暮らしを支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	住人さん一人ひとりとじっくり向かい合い、コミュニケーションを取りながら表情や行動から思いを汲み取るように心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今までの生活スタイルを大切に「あいわ」に入居しても、その人らしい生活スタイルが保てるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	気持ちよく過ごしてもらえる様に一人ひとりその人らしい身だしなみができるように介助・助言を心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	住人さんの能力に応じ準備片付けも支援している。また、楽しい食事となるようなアプローチを心掛けている。	冷蔵庫にある食材で献立を決め、利用者は調理から片付けまでの一連の工程で、やりたい人がやりたい事に参加している。畑で収穫した食材で梅干しや紫蘇ジュース、干し柿、ジャムなどを一緒に作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスの良い食事を提供している。毎月の体重測定表や水分チェック表も参考にし、主治医とも連携し医療面からのアプローチにも注意している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの重要性を理解し取り組んでいる。月1回歯科衛生士による口腔ケアを受けている。その際、衛生士により必要なケアの指示・アドバイスも受け実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄シートをもとに排泄パターンをつかみ支援している。その日の体調に合わせてながら職員同士情報交換しながら、安全でさりげないケアを心掛けている。	利用者の自尊心に配慮し、さりげない声掛けや誘導に努めている。入居後、適切な支援でリハビリから布パンツに改善できた利用者もいる。必要に応じて、夜間のみポータブルトイレを使用する利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	必要に応じて便秘・水分チェックをして個別対応している。医師と相談しながら排便コントロールも行っている。ヨーグルトやフルーツの提供もほぼ毎日している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴チェックシートをもとにほぼ毎日入浴している。本人の意思を尊重しながらゆったりとした時間を過ごせるよう支援している。	ほぼ毎日全員が入浴しており、2日以上入浴しないことが無いよう取り組んでいる。夕食後の入浴を基本とし、希望や必要に応じて夕食前にも対応している。職員はゆっくり1対1で向き合える時間と捉えている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの体調や気持ち、寝るタイミングを考慮し入床を促すようにしている。夜間帯の申し送りをもとに昼寝などの対応もしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の個別ファイルを使用し内服状況の把握に努めている。変更や臨時受診時の服薬などの際は、特に変化を注意して観察している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	イベントや季節行事・誕生日会など季節感を感じる事を大切に支援している。本人の好きなこと、継続できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍における外出支援の在り方や方法について話し合い、検討していく必要がある。	利用者の希望に応じた個別外出を中心に、花見や紅葉狩りなど、季節を感じられる外出支援に積極的に取り組んできた。コロナ禍の現在は、近隣の散歩やドライブ、畑仕事や花壇の世話などで外気に触れ、気分転換が図れるよう努めている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は預かり金として職員が管理している。自己管理ができる住人さんには、家族と相談しながら財布を持ってもらうこともある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙、年賀状のやり取りはスタッフと共に行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	夏は冷房、冬は床暖房や床暖を使用し、湿度や温度に気をつけ支援している。また季節に応じて花鉢を飾ったり、壁飾りを作ったり一緒に楽しんでいる。	ホームの木造の建物は、明り取りの窓が多くあり、豊かな自然光が入ってくる。暖炉を囲んで寛いだり、ウッドデッキでお茶を楽しんだり、憩いの空間が作られている。今年度は畑を拡張し、今まで以上に多くの野菜や花を育て、楽しみの時間を充実させた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	住人さんが好きな場所でくつろげるように音楽を流したり本を置いたり整備している。冬は暖炉もあり季節感も大事にしている。1階スペースも交流やレク等の楽しめる空間として活用している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	今までの生活が継続できるように愛用の家具・衣服・写真等を持参していただき、本人が居心地よく安心できる工夫をしている。季節感のある空間づくりにも配慮している。	テーブルや炬燵、遺影などの馴染みの品々が持ち込まれ、居室で編み物をしたりラジオを聞く、相撲観戦など、自由に暮らしている。居室で食事をしたり鍵をかけたたりする利用者もおり、本人のライフスタイルを尊重している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室やトイレなどわかりやすくネームプレートなどつけている。夜間など転倒のないようフラットランプをつけるなど安心して生活できる環境作りをつづけていく。		